

前期遠隔授業に対する学生アンケート(科目別)結果から考える授業改善

2020年5月26(火)～6月1(月)にかけて、前期遠隔授業に対する学生アンケート(科目別)が実施されました。本アンケートの目的は、個々の科目での学生の学びの実態を明らかにすることで、各科目担当の先生方に前期後半の授業改善に役立てていただくためです。先生方には担当科目(1名以上の回答があった科目のみ)のアンケート結果を郵送にてお送りしております。是非ともご確認いただき、アンケート結果を踏まえた今後の授業方針について受講生にフィードバックをお願いいたします。

今回のニュースレターは、このアンケート結果の全体像を分析し、今後の授業改善の方向性を考えるためのヒントを提供するために作成した拡大版です。ご自身の科目受講生の回答と比較していただくことで、何か見えるものがあるかもしれません。また、学生からの回答やコメントが特になかった科目につきましても、ご参考にしていただければ幸いです。長文になりますので、ご多用の方は赤字部分のみ飛ばし読みしてください。

1. 調査結果の概要(量的データ)

今回の調査対象科目数は1437科目、そのうち1名以上の回答があった科目は1047科目(回収率73%)でした。一方、1科目内での回答率(回答者数を受講者数で割ったもの)の平均は17%でした。

授業を受けるために使っているツール(複数選択可)は、「自分専用のパソコン」が76%となったことから、**4分の1の学生は、自分専用のパソコン以外**(たとえば家族共用のパソコンや、大学貸与のパソコン、タブレットやスマートフォン)で受講していることがうかがえます。

授業の受講時間帯は、「主に時間割表に定められてた曜日・時間以外」で受講しているが43%であったことから、**4割以上の科目が非同期型の授業**

であると考えられます。一方で学生の自由記述をみると、「同期型の授業ばかりで疲れる」というコメントもみられることから、学科によっては同期型の授業がほとんどということもあるようです。

科目内容のこれまでの理解度の自己評価は、「理解できている」「どちらかといえば理解できている」という**肯定的回答が72%**、「どちらともいえない」が21%でした。自由記述には、「小テストの正解がわからない」「解説がない」「課題のフィードバックがない」といったコメントが散見されることから、**フィードバックが行われれば理解度がさらに伸びると**想定されます。

科目の受講態度については、「集中して受講できている」「どちらかといえば集中できている」という**肯定的回答が83%**となり、**オンライン授業を真面目に受けている**学生の様子がうかがえます。(ただし、回答している時点で真面目な学生ともいえるので、一概には言い切れません…)

科目によってかかる課題達成時間にはばらつきがありますが、平均すると「60分以上90分未満」となります。「課題の多さが負担となっている」という声がある一方、「課題が少なく不安」という声もあり、また「課題が大変だがその分成長できているという実感がある」という声もあります。学生が成長を実感できないような過度な課題は与えるべきではありませんが、学生の声に耳を傾けながら課題の量や質を調整する必要があるでしょう。

授業で出された課題に対してのフィードバックの状況は、「十分である」「どちらかと言えば十分である」という**肯定的回答が55%**となっています。これは他の肯定的回答率よりも2～3割程度低い数字となっており、**もう少しフィードバックを丁寧に行っていただいた方が学生の学びになる**と考えられます。学生の人数が多く個別フィードバックが難しいことも多々あると考えられるため、課

題に対する解説を行うなど**全体に向けてのフィードバック**を行っていただき、**必要な学生のみ個別フィードバック**を行うなど、効率的にフィードバック量を増やしていただければ幸いです。

2. 自由記述から考える授業改善

今回、学生の自由記述から、授業改善につながるであろう 963 件のコメントを抽出しました。ここには、教員のオンライン授業の工夫に対する喜びや感謝など肯定的な意見、もっとこうしてほしいという改善提案など、両面の意見を含んでいます。これらを分類した結果、大きく 6 つの改善方向性を導き出すことができました。

(1) 授業スタイルの改善

本学ではオンライン授業のスタイルについて、非同期型 4 類型・同期型 2 類型の合計 6 類型を提示し、先生方にはそのいずれか、あるいはそれらを組み合わせて授業を行っていただいております。

この中でも第 1 類型に属する**資料提示・課題型**については、**学生の否定的な声が大きくなりがち**です。その最たる要因がフィードバックの少なさによるものと考えられます。本来この型は、**個別受講生に対する手厚いフィードバックを前提**とした授業スタイルです。従って、教材作成にかかる時間（個別学生の課題添削時間を含む）がかかり、小規模科目にのみ推奨しています。本スタイルをとっておられる科目では、**他のスタイルと合わせて授業実施していただくか、フィードバックを特に手厚くしていただきますようお願いいたします。**

また、資料提示・課題型よりも講義音声配信型が、さらに**動画配信型の方が学びやすい**とする声が上がっています。特に動画配信型はわかりやすく、一時停止をしたり、何度も見返したりして学べるため学びやすいと評判です。一方で、話す速さが早すぎる、声が小さい、雑音がうるさいなどの意見もあるため、動画作成時は、静かな空間で、できれば単一指向性のマイクを使って、**普段よりもゆっくり、大きな声で話し録音**していただくと、より良い動画になると考えられます。

教員や他の学生とやりとりできることから、**ライブ配信型・同時双方向型は最も授業らしいと評判**です。Teams や Zoom を使った授業は、教員も

学生も不慣れで初回はいろいろなトラブルがあるかもしれませんが、教員も学生も徐々に使い慣れていきます。このスタイルでは、学生はカメラをオンにすべきかどうかという議論があります。受講生全員がカメラをオンにすると受講しているかどうかを常に教員が確認できるメリットがある一方、ネットワークの通信負荷が大きくなり、音声や画像が乱れるといった問題の原因にもなるようです。そこで、教員が全受講にむけて話す際はカメラはオフにしてもらい、発問に対して回答する際や、グループで話し合うときは原則オンとする（オフにせざるを得ない場合は理由を教員やグループメンバーに伝えること）といった**ルールを最初に決めておく**と良いかもしれません。

(2) 授業設計の改善

まず、科目の意義や目的、目標を学生と共に再度確認することをお勧めします。学生によっては、学習目的や目標を見失い、受講する意義を見失っている者もいます。成績評価方法について不安を抱えている学生も多いため、これと併せて伝えることがベストでしょう。

「進度が早い」という声も散見されます。資格試験等の都合で進度を落とせないというケースもあるかもしれません。その場合は、**自習方法を学生に伝える、要所で小テストを行う（解答と解説も必ずフィードバックする）**などして理解度を確認し高めつつ進めるなどの工夫が考えられます。

「難しい」という意見もありますが、「難しいからこそやる気がでる」「頑張りたい」などの意見もあるため、単純に授業を簡単なものにするというよりも、**説明や教材を充実**させたり、予復習の方法を教えることで、難しかったけれども自分の成長につながれたという実感に結び付けることが得策かもしれません。

最後に 90 分の設計についてです。第 1 に開始時間と終了時間を守ることが求められています。特に同期型の授業では、定時に始まらないと学生は不安になりますし、定時に終わらなければ次の授業に出席できない危険性があります。非同期型の授業の場合でも**教材や課題の提示は授業開始時間と同じかそれよりも早く公開**することで、課題に取り組む時間を確実に確保できます。正規の時間

割通りスケジュールを自己管理して学んでいる学生のためにもお願いします。また長すぎる動画や短すぎる動画は学びの弊害となる可能性があるため注意してください。

第2に対面授業と同様に、授業の「**導入・展開・まとめ**」の**3部構成**がしっかりしていることが理解度の向上につながります。**導入**では前回の復習や本時の目標を示します。**展開**では、特に課題(小テスト含む)と連動した授業展開が学生にはわかりやすいようです。動画を見ながら課題を達成していくような方法や、前回の課題の結果をフィードバックしていくような展開です。90分間教員が一方的に講義をするスタイルであれば、間で5分程度の休憩をはさんだ方が学生の集中力を持たせることができます。**まとめ**では、本時の授業の重要点のおさらい、目標到達度の確認、課題の説明に時間を割きます。

(3) 教材の改善

教材は、主に「教科書・テキスト・参考書」「資料(スライド・レジュメ含む)」「映像・動画」の3パターンあります。

教科書・テキスト・参考書を用いる場合は、最初に確認すべきことがあります。それは、**①学生は持っているか、②持っていない学生はどうすれば入手できるか(入手にどれぐらい時間がかかるか)、③どの程度実際に活用するものなのか**、です。教科書購入の機会を逸してしまい、いまだに手元にない学生がいます。教科書は一般的な書店での購入が困難なものが多く、もし生協などを通じて購入した場合、どれぐらい入手に時間がかかるのかも考える必要があるでしょう。そして購入した学生には、どのようにそれを使えばよいかを指示し、有効活用できるようにします。そして授業や課題で用いるときは、使用する範囲や、該当するページ数などを適宜示すようにすると学生は学びやすくなります。

教科書・テキスト・参考書は大変便利なものですが、それに頼りすぎないことも注意点です。教科書をノートにまとめるだけでは、大学の授業とは言い難いでしょう。教科書に加えて解説授業を行ったり、教科書を使って考え達成するような課題づくりをしたりすることで、教科書をうまく生

かした授業が展開されることが期待されます。

次に、資料(スライド・レジュメ含む)教材の活用です。これの配信希望は学生からも多く上がっています。もし資料を用いた授業や課題を行う場合、**送付(公開)は早めに、公開期間は長めに**設定してください。なお、資料が多すぎると印刷代がかかりすぎるといふ弊害を生みます。中には自宅にプリンターがなく、コンビニ等でプリントする学生もいることを考慮していただければ幸いです。

最後に映像・動画教材についてですが、こちらも学生から希望が多く上がります。場合によっては同時双方向型の授業よりも、映像・動画を使った動画配信型の授業の方が良いとする学生もいます。動画については15分程度で区切ることが望ましいですが、強引に15分で区切るのではなく、動画時間が多少異なってもよい(例えば10分の動画もあれば20分の動画もある等)ので、**教授内容の塊ごとに区切った方が良いでしょう。そして、動画を連続してみられるように1つのフォルダにまとめたり、YouTubeであれば再生リストをつくるなど工夫してあげると学生は学びやすくなります。**

一方で、視聴方法がわからない、視聴できない、音声が聞き取りにくいといった声や、教員の実際の講義を録画したものは板書がみにくいといった問題が発生しがちです。これらに対しては、学生がいつでも教員に問い合わせられるよう、メールアドレス等の連絡先を受講生に伝え、対応・改善していけるようにしておくことが重要です。

(4) 教授法の改善

教授法については「講義法」「発問・ディスカッション」「グループワーク」の3パターンに分かれます。

まず「講義法」についてですが、最も多い要望は、「ゆっくり話してほしい」です。先述の通り、対面以上よりも意識的に話す速度を落とす必要があります。次に音声が聞き取りづらいという問題です。これは大変難しい問題ですが、マイクを使ってみたり、録音する部屋を変えるなどして、もっとも快適に収録できるよう工夫が必要なようです。多少の雑音は仕方ありませんが、自身で聞いてみて、あまりにも気になるような音の小ささや雑音があるようであれば、収録方法を変えた

方がよいでしょう。内容面については、説明をより詳しく丁寧にしてほしいという要望があります。学生のレディネス（その学生がもともと持っている知識や能力）を考慮して、どの程度丁寧に説明する必要があるか考えます。具体例や事例などは特に好評です。また詳しく説明する一方で、ここが大事だという重要点を明示し、知識や情報の量に飲み込まれて大事なことを見失ってしまわないようにすることも学習成果を高めます。最後に、講義の間に挟む脱線（雑談）について、ためになるものや、ちょっとした気分転換になるものについては学生も肯定的です。しかし、行き過ぎてしまうと逆効果になりますので気を付けてください。

次に「発問・ディスカッション」についてです。発問・ディスカッションは同時双方向型のオンライン授業ならではのもので、「他の学生の意見が勉強になる」など、学生には好評です。しかし、特定の学生ばかりが指名されるようになると、不満がたまるようです。学生を授業に巻き込み、多様な考え方を引き出すためにも、**様々な学生から意見を集める**と一層効果的です。また、発問やディスカッションの際に、学生にチャットに書き込ませることがあります。この方法だと、マイクが不調の学生も参加することができ、また教員の講義と並行して学生の考えをみとることもできます。チャット利用時に1点だけ注意したいことは、**書き込む時間を十分に確保**することです。タイピングになれていない学生が多いため、ある程度時間を確保し、不慣れな学生も参加できるよう配慮できると、学生の参加度が高まるでしょう。

最後に、「グループワーク」についてです。オンラインだと難しい印象がありますが、Zoomはブレイクアウトルーム機能、Teamsはチャンネル機能を用いることで複数の小グループをつくって学生同士のグループワークを実現することができます。オンライン授業になり、学生同士の会話をする機会がほとんどなくなってしまった学生にとっては楽しく、有意義で、感動すら感じるといったコメントが寄せられます。一方で、「初対面では話が弾まない」「毎回リーダーが同じ」など、コミュニケーションやグループワークの難しさを訴える学生もいます。これらは対面授業でもよくあることです。教員としては**アイスブレイク**（緊張を解きほ

ぐすための工夫）を丁寧に رفتり、**コミュニケーション力を高める**ための考え方を伝えたり、役割を毎回変更するようルールづけするなどして対応したいところです。特に、オンラインになると反応が薄くなりがちです。他の学生の発言に対してうなずきや相槌など積極的に反応していくことで、話しやすい雰囲気生まれることなどを伝え、うまく意見が言えないときでも、**うまく人の話を聞くよう指導**します。最初はできないところから、徐々にできるようになるということが成長実感にもつながっていきます。

オンライン上のグループワークに慣れていないうちは、学生も機器のトラブルに見舞われ、かつそれに対応しきれないことがあります。グループワークの導入時は、**作業が単純な課題**を与え、**時間も長めに**設定し、終了後は何か困ったことはなかったか、うまく対応できたかを**確認**します。

オンライングループワークと対面授業で最も異なる点は、教員が全グループを一望できないことです。躓いているグループがあっても即座には見つけることができません（各グループの様子を見て回ることはできます）。そこで、できるだけ躓きを予防できるように、グループでやるべき課題の指示は具体的かつ明確に示します。それも口頭だけではなく、文字などで記しておくことです。Zoomであれば、ブレイクアウトルームに移す前に、全員に向けてチャットに指示を書きおきます。やるべきことがわからなくなったら、チャットをみて確認するよう伝えます。Teamsであれば、各チャンネルに事前に書き込んで置いたり、共同編集するためのファイルを張り付けておいたりします。

（5）課題の改善

課題でよく言われていることは、量が多すぎる、学生が忙殺されているということです。確かに量が多すぎることにより、1つひとつの課題に対する向き合い方がいい加減になってしまい、自主学習を阻害してしまうといった弊害の声がきかれます。一方で、課題の意味を見いだせればしんどくとも頑張り、成長実感が得られているという学生もいます。また、課題が少なくて不安という声もあがっています。要するに重要なことは課題の多少ではなく、**学習目標達成に必要な適切な課題量**

と質を設定し、学生に先々の予定も含めて伝えることではないでしょうか。

課題改善の出発点は、その課題が何のための課題かを再考し、**課題達成の意義や目的を学生に伝える**ことです。次に、課題内容そのものを工夫します。例えば、毎回同じような要約課題を出すのではなく、これまで得てきた知識を使って解くような問題を提示することができます。また、難度が高い課題を出す場合は、参考文献やヒントを提供し、努力すれば乗り越えられるようにすることも必要かもしれません。課題形式を工夫することもできます。単に教科書をまとめるだけではなく、テーマを与えて調べ学習をしたり、プレゼンテーションを作らせ動画撮影して提出させたりすることなども考えられます。最後に、内容の説明は具体的にするようにしてください。課題達成のための**フォーマット**を提示し、場合によっては**模範例**を示すことで、どのようなものを作成し提出すればよいかイメージを沸かせることもできます。

次に、課題提示の仕方を改善します。課題は**できるだけ早く提示し、 \times 切までの期間を長めに設定**します。遅くとも当該授業日には課題を設定し、1週間以上の期間を設定します。特に期末レポート等、課題達成に時間がかかる**重い課題については1か月前に提示**しておくこと、学生もスケジュール管理をしながら課題を達成することができます。また、KT-noteにもTeamsにも提出期限設定機能がついていますので、それと実際の提出期限を正確に合わせるよう注意してください。

最後に、課題へのフィードバックについてです。学生が最も心配していることは、「自分は課題が提出できているか不安」なことです。KT-noteやTeamsを通じて提出された場合は、教員がコメントを記入しなくても学生は一目で完了状況を確認できるはずですが、その方法を学生が理解していない可能性があります。学生から見たKT-noteやTeamsの提出確認方法は『第3回オンラインFD学習会スライド』のp.34-35をご覧ください、必要があればこのページを学生にご共有ください。

次に学生からの要望が多いのは、「**模範解答を提示してほしい**」「**解説がほしい**」というものです。課題はやりっぱなしでは学習効果が得られません。自分が取り組んだ課題の出来栄えと改善方向性を

理解して初めて学ぶことができます。特に個別のフィードバックがあると学生の学習意欲を高めることができますが、個別のフィードバックが難しい場合は授業内で全体に向けてフィードバックしたり、解説教材を作成し受講生全体に配信したりすることをお勧めします。その際、講義のどこで扱った内容か、教科書では何ページが参考になるかなど、授業内容と連携させた解説にするとより効果的です。Formsを使った小テストであれば、自動採点機能が便利です。全体に向けてのフィードバックで1点注意いただきたいことがあります。それは、**個人情報(特定の学生の氏名等)を出さない**ことです。教員が良かれと思ってやったことでも、学生にとっては不快に感じることもありますので特に気を付けてください。

(6) 評価の改善

期末が近づくにつれて、成績評価に対する学生の不安も高まってきます。シラバスの変更に気づいていない、見方がわからない学生もいます。そこで、授業の今後の予定と合わせて、改めてオンライン授業下における成績評価方法や基準について学生に伝えみてはいかがでしょうか。特に今回は、多くの科目が期末レポートを課すことが想定されます。**早めに期末レポートの要領を伝え**、計画的に達成できるよう助言した方がよいでしょう。

なお、教務部より**期末試験方式から変更依頼**がありました。(『2020年度前期すべての授業の遠隔授業化に向けて』4月30日付、5頁参照)現時点でも期末試験を予定している科目では、成績評価方法の修正と学生への伝達が必要となります。

3. 授業改善の原点はコミュニケーション

ここまで、授業スタイル、設計、教材、教授法、課題、評価の6観点で授業改善の方向性について書かせていただきましたが、**科目の状況によって最適解は異なる**はずですが、授業改善の原点は、学生と教員、教員と教職員が互いにコミュニケーションを取り合い、相互理解を深めていく過程にあります。このような状況下だからこそ、コミュニケーションを積極的に取り合い、よりよい学びを実現してまいりましょう！乱文乱筆で失礼をいたしました。